

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



令和2年度秋季企画展『やおの古墳時代(初頭～前期)―3～4世紀のようす―』から

1. はじめに

秋季企画展では、古墳時代(初頭～前期)の中河内地域の動向やその役割を考察してみました。畿内の古墳時代初頭前葉(3C初頭)には、奈良盆地南東部でヤマト王権が成立したとされ、3C中葉～4C中葉までは、同盆地南東部の纏向古墳群などで大王墓が造営されます。広域な政治集合体の国へと発展したヤマト王権時代(3～4C)における八尾市域の主要な遺跡を取り上げ紹介いたします。



図1 八尾市内の古墳時代初頭～前期の集落分布図

2. 古墳時代初頭～前期の河内の遺跡

市域の平野部では、主要河川周辺に古墳時代初頭～前期前葉の遺跡が数多く見つかっています。特に久宝寺遺跡では、外洋航海が可能な前期後葉(3C中葉)の準構造船が見つかり、当時、瀬戸内海から河内湖、さらに主要河川の利用で市域南部付近まで通航が可能であったことを示しています。主要河川の周辺遺跡からは、吉備・四国東部・山陰など、西日本の各地域との関連を示す外来系土器が多数出土しており、この時期、各地域と交流が行われていたようです。

このように、河内湖南岸の広大な平野部に位置した当時の市域は、瀬戸内海、河内湖、主要河川を介した水上交通の要衝地で、西方地域からの到着点であるばかりでなく、当時の政治の中心地であった東方の奈良盆地南東部とは、旧大和川水系などを通じて「人」「物」「情報」を繋ぐ中継地の役割を果たした地域であったことを示しています。

3. 発掘調査で発見された河川跡と主な遺跡

市域の中央部では、「小阪合分流路」「萱振分流路」、西部に「久宝寺分流路」と名付けられた大規模な河川が存在が確認されています。小阪合・萱振の分流路の流域には、北から西郡・萱振・東郷・成法寺・小阪合・矢作・中田・東弓削の各遺跡があり、それらをまとめ「東郷・中田遺跡群」と呼び、「久宝寺分流路」の流域には、美園・久宝寺・跡部遺跡のほか、大阪市の加美遺跡があり、「久宝寺・加美遺跡群」と呼ばれています。そのほか、羽曳野丘陵の北端に位置する八尾南・太田遺跡や市域東部の生駒山地西麓部に位置する大竹西・水越・郡川遺跡などからもこの時期の集落はがみつかっています。

遺跡(遺跡名)	弥生時代後期	古墳時代前期			古墳時代中期		
		前期	中葉	後葉	前期	中葉	後葉
西郡							
東郷							
成法寺							
小阪合							
中田							
矢作							
東弓削							
田井中							
美園							
久宝寺							
跡部							
大竹西							
水越							
郡川							
加美							
神宮寺							

表1 市域の地区・遺跡別の弥生時代後期後半から古墳時代中期初頭の遺跡推移

初頭前葉(3C初頭)の集落分布には、弥生時代後期末から継続する集落と庄内式期に新たに成立した集落があります。このことは、外来系土器の増加に象徴されるように、この時期の集落の中に移住民を中心とした集落が成立したものと考えられます。その後、古墳時代初頭中葉～前期初頭(3C前～後葉)にかけて、当時の主要河川の流域を中心に数多くの集落が出現することになります。

集落は、初頭中葉(3C前葉)から急増した居住域が前期前葉(4C前葉)以降に減少し、地域間交流を示す外来系土器も激減しています。その一方で、前期中葉(4C中葉)には、市域北東部の「楽音寺・大竹古墳群」内の西ノ山古墳や平野部の東郷遺跡内において首長墓が築造されるなど、新たな地域社会の枠組みがこの時期に形成されたものと考えられます。

4. 市域の主な集落

小阪合分流路周辺の遺跡群(図2・3)

東郷遺跡では、近鉄八尾駅前の北側を中心に古墳時代初頭前葉～前期後葉(3C初頭～4C後葉)の居住域や生産域及び墓域が展開していることが判明しています。中でも東郷遺跡第64次調査で検出した前期中葉(4C中葉)の鱈付円筒埴輪を持つ8古墳、90古墳は、東郷遺跡周辺地域を包括した地域首長墓と考えられ、特筆できます。小阪合遺跡、中田遺跡、成法寺遺跡、矢作遺跡などでは、小阪合分流路の自然堤防上に数多くの集落が存在していることが明らかになってきました。特に中田遺跡南東部の土坑(刑部土坑)からは、吉備地方の特徴を持つ初頭前葉(3C初頭)の古式土師器や最古段階の河内型庄内式甕が出土し、また、成法寺遺跡第29次調査でも、同時期の吉備系の土器や河内型庄内式甕が出土しており、これらは、古墳時代初頭前葉の中河内地域の社会状況を考えるうえで重要な資料です。また、小阪合遺跡第42次調査では、船と鹿を描いた初頭中葉(3C前葉)の手焙り形土器が見つかりました。当時の「小阪合分流路」一帯の様相を知るうえで貴重な絵画土器です。この他、小阪合遺跡第41次調査では、河川跡周辺で行われた前期後葉(4C後葉)の水辺の祭祀跡が検出されています(写真1)。ここからは、大量のミニチュア土器や鏡、玉、剣、鉾などの祭祀遺物が見つかり、当該期に、祭祀を実施し得た集団が存在したことが想定されます。



図2 東郷遺跡 古墳時代初頭～前期の集落分布図

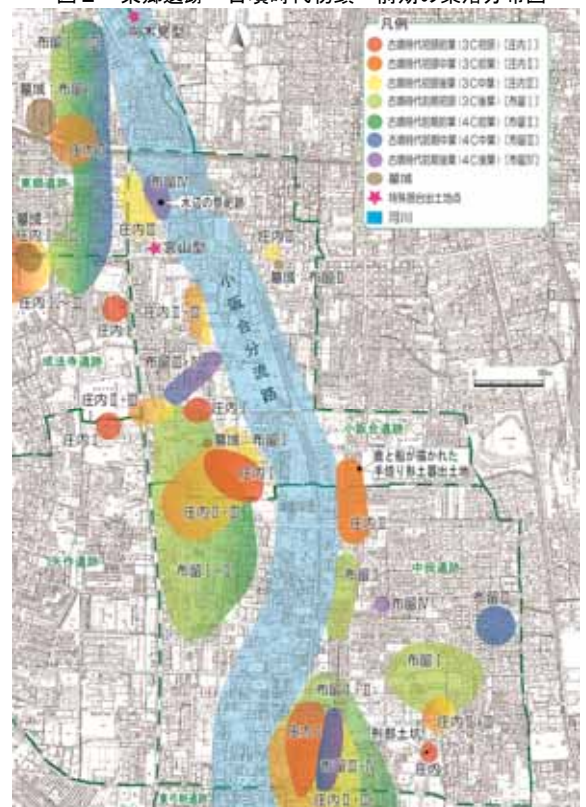


図3 東郷・中田遺跡群 古墳時代初頭～前期の集落分布図



写真1 小阪合遺跡第41次調査 水辺の祭祀跡の検出状況(古墳時代前期後葉)

久宝寺分流路周辺の遺跡群(図4)

久宝寺遺跡では、久宝寺分流路の両岸に集落が展開しています。特にJR久宝寺駅の西側では、古墳時代初頭前葉(3C初頭)の集落が出現し、以後、古墳時代前期(4C)にかけて北と南へ点々と増えることが判明しています。また、この時期の墓域は遺跡中央と北西部の加美遺跡で群集する墳墓の存在が明らかになり、周りに生産域が存在する集落であったことが判ってきました。居住域や墓域からは、吉備や讃岐等、西日本はもとより、朝鮮半島南部系(写真2)や、東は関東地方からの土器類が出土し、準構造船も発見していることから、交通の要衝であったことが想像できます。

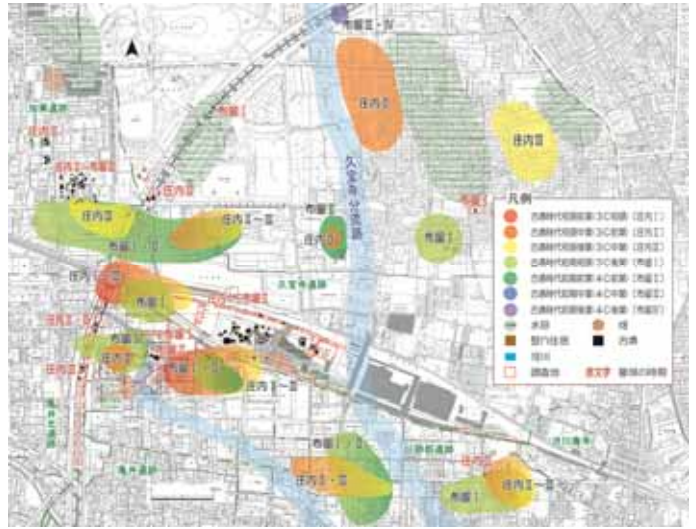


図4 久宝寺・加美遺跡群 古墳時代初頭～前期の集落分布図



写真2 朝鮮半島南部系土器
上-台脚付短頸壺
下-把手付鉢

羽曳野丘陵北辺の遺跡(図5)

市城南西端に位置する八尾南・太田遺跡は、羽曳野丘陵の北端部に位置します。古墳時代初頭前葉～前期後葉(3C初頭～4C後葉)の集落は、地下鉄八尾南駅の調査地東部および南東部に隣接する地点を中心として広がっていることが判ってきました。中でも吉備の土器が出土した八尾南2号墳は、河内と吉備との強い結びつきが伺える大変重要な墓であり、特筆できます。



図5 八尾南・太田遺跡 古墳時代初頭～前期の集落分布図

5. 活発な地域間交流

この時期には、他地域からの搬入土器(外来系土器)が数多く見られるようになります(図6)。逆に河内型庄内式甕は主に西日本の主要な遺跡へと持ち運ばれている状況が確認でき、各地との交易が盛んであった事を物語っています。



図6 市域に持ち込まれた外来系土器(3～4C前葉)の搬入地域

令和2年度のイベントから

●秋季企画展関連講演会

2020年10月25日(日)には、関連講演会を開催しました。演題は『古墳時代初頭～前期の地域間交流』で、河内に持ち運ばれた他地域の土器が出土する遺跡を紹介し、逆に、河内で作った庄内式甕が、他地域へ運び込まれている状況をお話し、当時、活発に各地と交流していた河内の様子をお伝えしました。



●八尾・考古学散歩

2020年11月21日(土)には、八尾・考古学散歩を実施しました。今回は、「東郷遺跡・萱振遺跡を歩く」と題し、東郷遺跡や萱振遺跡等の発掘地点を巡りました。また、途中、埋蔵文化財調査センターへ立ち寄り、秋季企画展「やおの古墳時代(初頭～前期)」を観覧し、市内の遺跡について学びました。



河内、近江、阿波の土器が同じ遺構から出土！

久宝寺遺跡第65次調査の溝(SD502)から、古墳時代初頭後葉(3世紀中葉)の中河内産の甕(図7-1)と共に近江産の甕(図7-2)と阿波産の広口壺(図7-3)が見つかりました。

中河内産の甕は、河内型庄内式甕で、胎土には生駒山地西麓で産出する角閃石を多量に含んでいます。体部の外面に右上がりの細筋のタタキを施し、内面をヘラ状工具でケズリ取り、厚さ2~3mm程度にまで薄くしています。近江産の甕の口縁部は受け口状で、口縁部や体部の外面に細い筋状の文様が描かれています。文様は鋭利な刃物(金属製工具か?)で施された可能性が高いと考えられます。このような器形と施文は、近江地域(滋賀県)の遺跡から出土する土器に特有のもので、阿波産の広口壺は、球形の体部から頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は水平近くまで開き、端部は上下にややつまみ出し面を形成しています。このような器形は、阿波地域(徳島県)の遺跡から出土する壺に特有のもので、

これらの搬入土器は、当該期中河内に各地域の人々や物が集まって来たことの証であり、当時の広範囲におよぶ地域間交流が伺える貴重な資料です。

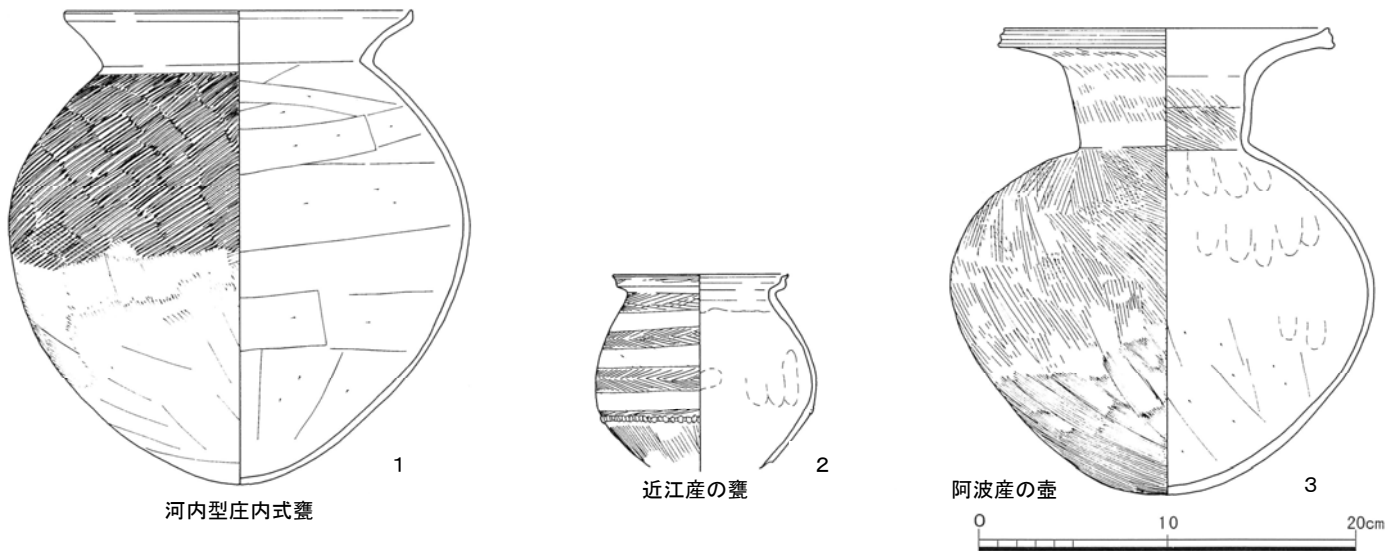


図7 溝(SD502)出土遺物実測図

出典：荒川和哉 2006「VI 久宝寺遺跡第65次調査(KH2005-65)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告 89』財団法人八尾市文化財調査研究会

編集後記

令和2年度秋季企画展では、古墳時代初頭～前期の他地域から持ち運ばれた土器も取り上げました。

中でも、四国の香川県(旧国：讃岐)から運ばれたと考えられる大型複合口縁壺は、ひときわ目立つ存在でした。この壺は、河内が讃岐と交流していた証しで、当時、人々の往来が活発であった事を物語っています。しかし、こんな大きな土器をなぜ運ぶ必要があったのでしょうか。また、どのような手段で遠くから運んだのでしょうか。まだまだ謎が多く、わからないことが多々あります。

〈KN〉



イベント情報

◆八尾市立埋蔵文化財調査センター通常展「八尾の地宝」

内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の遺物を中心に展示
期間：令和3年2月17日(水)～6月11日(金)
時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)
休館日：土、日、祝日 (ただし5月23日(日)は開館)



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 24号』

発行：2021年3月31日 八尾市立埋蔵文化財調査センター

(編集：指定管理者 公益財団法人八尾市文化財調査研究会)

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2

TEL・FAX 072-994-4700

E-mail: maibun_zyao@cmail.plala.or.jp

